

<戻る>

2019/02/24

<https://archive.fo/Ty1gc#selection-12057.4-12057.75> より

れてゆくものと捉えられているのか。
3) また、そうした社会が何故に“再”形成されてゆくものと捉えられなければならないのか。

言うなれば、本論は、ブルーマーのシンボリック相互作用論のバースペクティブから「社会学の根本問題」を解こうとするものである。というのも、これまでのブルーマーのシンボリック相互作用論に関するわが国の諸研究においては、まさにこの根本問題を念頭においた研究が充分になされてこなかったと捉えられるからである。なお、如上の目的を遂行する上で、看過してはならない重要な論点がある。それは、個々人が社会化されるそのメカニズムとは如何なるものなのか、個々人が社会を形成するそのメカニズムとは如何なるものなのか、そして、そうした社会が何故に“再”形成への扉を開くものと捉えられなければならないのか(その論理的必然性とはどのように説明されるのか)、この三つの問を、ブルーマーのシンボリック相互作用論の概念的柱石となっている「自己相互作用」(self-interaction) 概念との確固たる結びつきのもとに明らかにしなければならないという論点である。すなわち、本論は、この自己相互作用概念との確固たる結びつきのもとに、上記の三つの問を解明しようとするものである。

まず第1章においては、主として、上記の問い1)の解明が企図されている。またそれに付随して、ブルーマーにおける「個人と世界との関係」把握、ならびに、「行為」(補注1)) 把握の解明が企図されている。ブルーマーのシンボリック相互作用論において、その概念的柱石となっている「自己相互作用」とは、ブルーマーによれば、「自分自身との相互作用」(interaction with oneself) とも言われ、それをブルーマー

は、「文字どおり、個人が自分自身と相互作用を行っている過程」であるとか、「個人が自分自身に対して話しかけ、そしてそれに対して反応する、というコミュニケーションの一形態」であると表現している。すなわち、他者との間で行う社会的相互作用を自分自身と行うのが、換言するならば、他者との社会的相互作用を個人の内に内在化(internalize)させたものが、ブルーマーの言う「自分自身との相互作用」すなわち「自己相互作用」に他ならない。またこの概念は、ブルーマーにおいては、「表示」(indication)と「解釈」(interpretation)からなる「解釈の過程」(process of interpretation)と同義で用いられているものである。かねてより、彼の自己相互作用に関する立論については、それが「社会化」(socialization)に関する議論を看過した「主観主義」的なものである、との批判が提示されてきたが、本章は、そうした批判に対する反論としての位置づけも有している。

自己相互作用概念を軸とする、ブルーマーのシンボリック相互作用論において、「社会化」(socialization)とは、他者との社会的相互作用を方向付ける「定義の諸図式」(schemes of definition)と、自己との相互作用(自己相互作用)を方向付ける「一般化された諸々の役割」(generalized roles)という二つの解釈枠組みを、個人が、自己を取り囲む「他者たちの集団」[(補注2))] (groups of others)から獲得し、そうした枠組みに、自らが営む相互作用における解釈・定義を方向付けられること、と捉えられている。ブルーマーにおいて、解釈・定義とは、一般化された諸々の役割の獲得→定義の諸図式の獲得→一般化された諸々の役割に方向付けられた自己相互作用における定義の諸図式の吟味→その吟味の結果、修正・確定された、

“新たな”定義の諸図式に基づく外界の知覚(perception), という一連のプロセスと捉えられている。このプロセスこそ, 「意味付与」(conferring of meaning) と呼ばれる営みに他ならない。

なお, 上記において“外界”とは, プルーマーにおいては, 「現実の世界」(world of reality) を意味し, プルーマーにおいて「人間」とは, そうした現実の世界(=社会的・物的環境)に取り囲まれた存在と捉えられている。人間は, 上述の意味付与の営みを通じて, この世界から, 自らにとっての「対象」(object) を形成する存在と捉えられている。なお, プルーマーにおいて「意味付与」とは, ある一定の「パースペクティブ」(perspective) に基づく「知覚」(perception) と同義のことと捉えられている, という点をふまえるならば, 「対象」とは, そのパースペクティブによって人間が捉えた, 現実の世界のある一定の部分であるとも表現できる。プルーマーは, この「対象」を, 「物的対象」(physical object), 「社会的対象」(social object), 「抽象的对象」(abstract object) の三つに大別している。

人間にとっての「世界」(world) とは, こうした「対象」から“のみ”構成されるものと捉えられ, 人間はこの意味での「世界」の中に住んでいる。その意味で, プルーマーにおいて「個人と世界との関係」とは, 人間による世界(現実の世界)に対する自己相互作用を通じた解釈・定義(意味付与/知覚)によって定められるものと捉えられていることになる。

とはいえ, プルーマーにおいては, 個人と世界との関係が, 人間による世界に対する一方的な解釈・定義によって“決定”されるものと捉えられているわけではない。なぜなら, 解釈・

定義されるその世界, すなわち現実の世界には, “いつでも” そうした解釈・定義に対して「語り返し」(talk back) してくる可能性が存在するものと捉えられているからである。また個人は, その「語り返し」を契機として, 自らの解釈・定義の妥当性の如何を知ることが出来, その結果として, 自らの解釈・定義を修正することになる。したがって, プルーマーにおいて, 個人と世界との関係とは, 個人による世界に対する解釈・定義によって一義的に“決定”されるものと捉えられてはならない。プルーマーにおいて, 個人と世界との関係とは, 個人による世界に対する解釈・定義と, 世界からその解釈・定義に対して寄せられる「語り返し」との“絶え間ない”相互作用を通じて, “絶えず”形成・再形成されるものと捉えられなければならない。

こうした「個人と世界との関係」把握をふまえた上で, では, その個人の「行為」(action) とは, 如何なるものと捉えられるのか。プルーマーにおいて行為(「個人的行為」(individual act))とは, まず何よりも, 現実の世界に対する「適応」(fit, adjust) 活動と捉えられており, それは, 現実の世界からの語り返しを契機とした, 絶えざる形成・再形成を余儀なくされるものと捉えられる。プルーマーは, この「行為」を, 「衝動」(impulse) → 「知覚」(perception) → 「操作」(manipulation) → 「完結」(consumation) という一連のプロセスからなるものと捉えているが, 上記の「個人と世界との関係」に関する知見をふまえるならば, このプロセスは, 「衝動」→ … → 「完結」で終了するものとしてではなく, 「衝動」1) → … → 「完結」1) → 「衝動」2) → … → 「衝動」n) と絶えず継続して行くものと捉えられなければならないことになる。



・桑原司, シンボリック相互作用論序説(3): 東北大学審査学位論文(博士)の要旨. 『経済学論集』(54) 鹿児島大学経済学会. 2019-02-23.

URL:<https://web.archive.org/web/20170929021707/http://www.peeep.us/3757d32e>.

Accessed: 2019-02-23. (Archived by WebCite® at <http://www.webcitation.org/76PqF8ocf>).

<https://archive.fo/Ty1gc#selection-12075.4-12075.75>

- ・
- ・
- ・

